

〈隅田川〉の船頭と商人

田口和夫

先日、ある能会で、〈隅田川〉を観た。シテと子方はすばらしかつたが、ワキとワキツレは能の中できちんと呼吸できているとは言いかねる存在だった。おおいに不満を残したのだが、こういう事があると、かねてから抱いていた疑問が再発することになる。〈隅田川〉のワキ船頭とワキツレ商人（都人）が能の中で占めている位置についての事である。

〈隅田川〉の作品研究は人気曲だけに数有り、伊藤正義氏の新潮古典集成『謡曲集』各曲解題でも香西精（「隅田川作者と本説」観世昭35・3、『能謡新考』昭47）・表章（「作品研究隅田川」観世昭43・3）・金井清光（『能の研究』昭44）・天野文雄（「作品研究隅田川」観世昭54・3）各氏の論を挙げてゐる。これらを参照しながら、私の小さな疑問について考えてみることにする。

船頭の登場段については、金井論が車屋本と伝小次郎信光本とを比較し、天野論が現行観世流と禪鳳元安本とを比較して言及してい

る。同じことだが、最古の写本でもある下掛りの元安本と、上掛りの古本である堀池識語本（日本古典文学大系『謡曲集』による）の同部分を比較してみよう。

これは武蔵国すみだ河の渡守にて候。大事のわたりにて候間番におりてわたし候。今日は某が番にて候間。旅人を待て舟をわたさばやと存候（元安本）

これは武蔵の国隅田川の渡し守りにて候。今日は舟を急ぎ人びとを渡さばやと存じ候。またこの在所にさる子細候ひて、大念仏を申すこと候ふ間、僧俗を嫌はず人数を集め候。そのよし皆々心得候へ（堀池識語本）

このいずれが元雅作の原形に近いかという問題については、金井論と、より慎重に考察した天野論とも、大念仏に言及しない下掛り（元安本）の形が元雅作の原形に近いであろうとする点では一致してゐて、これは問題あるまい。堀池識語本のセリフの最後が「触レ」の形式になっていることは面白い。船頭である

以上の、大念仏の世話人的機能をワキに持たせているからである。

室町時代の演出を知らせてくれる「舞芸六輪」に「ワキは舟人、二人出る也。あき人二人」とある、「船頭が二人」と読めるが、台本上では二人であるべき痕跡はない。（自然居士）のように二人で舟を漕ぐ演出が存在したか。本来のものではあるまい。

ここで私の疑問を提出したい。現行の演出では、このワキは当然名ノリ笛で登場して名乗るが、元安本のように、そのような指示がなく、「ことば」としか記されない台本を見ると、これはアイ狂言のセリフでもよいのではないか、と思えてくる。即ち〈自然居士〉や〈実盛〉と同様の口開けアイとして演じることが可能だという事が、疑問なのである。

船頭がアイだったとすれば、〈隅田川〉の前後のつなぎの場で長大な語りをすることも自然ということになる。それとともに、天野論で指摘されていた「ワキツレの存在そのものの異様さ」も解決される事になる。「舞芸六輪」では「商人二人」が登場することになっており、元安本でも、次第で登場した商人が名乗り、道行の上ゲ哥の後の着キゼリフにおける問答―他本では船頭と商人（旅人）との問答になっている所だが―は次のように進行する。「ことば」と注記される着キゼリフの後に、鉤点など無しに「あの跡より人のおほふあつま

つて来て候は何ごとにて候ぞ」という問いかけが続く。次に「つれ」と注されるセリフ、「あれは昨日のとまりにありし女物狂にてありげに候」があり、次に「さらばかの者を待ちて舟にのせばやと思ひ候」となる。最後のセリフは船頭がふさわしいとも言えるのだが、セリフの受け渡しからは、商人A・商人B・商人Aの順の商人同士の会話となる。「自分たちだけでなく、あの者も待つて、一緒に舟に乗せよう」という意味に解することになろう。日本の文学古典編『能 能楽論 狂言』における竹本幹夫氏による翻刻がワキ連1とワキ連2の会話として処理しているのは同じ趣旨と理解できる。

天野論はここを船頭と商人との会話と解しているが、「異様さ」とした理由は、次のようなものである。

狂女物の冒頭の構成は、ワキ（もしくはツレ・ワキツレ・アイ）の登場のあと、すぐにシテ登場の段に接続するというのが基本的な形である。「隅田川」の場合は、その基本形にワキツレ登場の段が付加されていることになる。

天野氏は従つて、ワキツレは「一点景としての旅人」であつて、「ワキツレ登場の段は構成上不可欠なものではない」と判断される。商人の役割は、この段ではもう一つの道行きによつて「東路の果」という場面設定の写実的効

果」と「賑わいを立体化することに寄与」することになつていとされる。そして元安本の舟中の段において船頭の「語りを引き出す役を負わされている」ことにも注意される。船頭はアイ狂言の役であり、商人がワキ・ワキツレであると考えて、天野氏のこの意見を見直してみるとどうなるであろうか。まずアイが口開けとしての場面設定をする。次いでワキ商人たちが次第・道行で登場し設定された場所に到着する。そしてシテの登場段となる。こう考えれば、その構成は異様ではなくなり、基本形に準じることとなる。

ワキとしての商人は、この後、船頭の語りを引き出す。より拡大すれば、梅若丸が狂女の子であることが判明した時の、「今まではよそのこととこそおもひて候つるに。さては御身のうへにて候けるか。あらいたはしや候」も商人の言葉であり得る。元安本では「船頭」の言葉とされる大念仏を勧める「すでに月出で……」以下のワキの言葉も商人のものとして成り立たなくはない。こう考えれば、商人の活躍部分も相当に増えるのである。

構成上は妥当なこの演出が、実際に行われていたのか、という点、それは否であろう。元安本を含めて、すべての台本がこの能におけるアイの登場を記述してはいないし、なによりも、この船頭は前半部分で、商人をさしおいてシテの演技と深くかかわっているからで

ある。商人が本来のワキであるならば、前半においてもシテの演技展開にもう少し関わつていてもよさそうなものである。なお、これが「東国の商人」であることは、シテならびに観客に「人商人」を連想させる存在としての意味があつた筈であることにも注目しておきたい。

このように考えられようか。元雅は、初めアイを活用するつもりで構想した、しかし完成にいたる段階では、アイではなくワキに演じさせることにした。だから形態は口開けアイだが実際はワキの分担するところとなつたのである。こういう順序である。

その理由は、そのときの世阿弥のグループに、この語りを演じ切れる程の技量を持った狂言役者がいなかった、ということに尽きるのではない。当時の狂言役者についての世阿弥の言葉からはそういう推測が成り立つ。現在の、勝れた語りの技法を持つ狂言役者がこの船頭を演じたら、よほど面白いのか、かろうか、そのような試みを観てみたいと時々空想するのである。

(文教大学教授)